

# Lijgend/Passive の訳述起原\*

齊木 美知世  
鷲 尾 龍 一

## 論文要旨

大槻文彦は「和蘭字典文典の譯述起原」において、「受身」という用語をオランダ語の“Lydende Werk Woorden”に相当する「今譯」と位置づけ、『訂正蘭語九品集』の「被動詞」から続く、蘭学の系譜に連なる訳語として提示している。

文法用語としての「受身」は、大槻が考案したものであると大槻自身が述べていることもあり、一般にそう認定されている。専門的な文献だけではなく、『日本国語大辞典』などの信頼できる辞書も、「受身」の初出例として「語法指南」の一節を挙げている。しかし、大槻が用いた意味での「受身」は、実際には大槻以前の文献にも見出せるため、「訳述起原」に関する従来の記述には修正が必要となる。

大槻の「語法指南」はまた、現代的な意味での「助動詞」を日本文法の用語として用いた嚆矢とされるが、「助動詞」という表現自体は大槻以前に使用例があり、これまでに指摘されているところでは『蘭英和字彙』が最も古い。しかし、これについても、さらに古い使用例を指摘することができる。『日本国語大辞典』は「助動詞」の初出例をヘボンの『和英語林集成』第3版に求めているが、この選択には考えるべき問題があると思われるので、上の「受身」と併せて検討する。

**キーワード**【大槻文彦、「語法指南」、受身、働掛、助動詞】

## 1. はじめに

大槻文彦が「和蘭字典文典の譯述起原」を発表したのは、『廣日本文典』を世に出した明治30年の翌年であるから、すでに蘭学は廃れ、「英佛獨逸の學」を中心とする洋学全盛の時代であった。英仏独語の文典や辞典も整備されていたが、それらはすべて「蘭學諸先輩が苦心の餘澤ならざるはなし」とのことで、その「事歴を述べて日本文學史の史料に資せむ」との意図をもって「譯述起原」を執筆したという<sup>1)</sup>。

大槻は幕末以来の蘭学史、とりわけ辞書と文典の發達史を概観した上で、先人が文法用語をどのように邦訳してきたのかを文典の比較によってまとめ、対照表の形で一覧にしている。比較されている文典は、馬場佐十郎『訂正蘭語九品集』、藤林普山(泰介)『和蘭語法解』、羽栗洋斎『六格前篇』、大槻玄幹『蘭學凡』の四編であるが、最初期の西洋式日本文典として知られる鶴峯戊申の『語學新書』は、「日本の語學書にはあれど書中の類別造語和蘭文法

のものに酷似したれば表中に加へたり」との理由で一覧表に含め、それに「現今行はるゝ譯語」を「今譯」として最後の行に掲げて対照している。表の最上段にはオランダ語の「原語」を当時の表記法で示し、括弧に入れて英語を傍記している。

文法用語は“Sprak Kunst” (grammar.) から始まり、その訳語が「學語全書」(『九品集』)、「言學科」(『語法解』)、「文學全書」(『六格前篇』)、「文科之學」(『蘭學凡』)と変遷し、『語學新書』では「語法」、そして「今譯」の「文法」に至る、という情報が整理されている。オランダ語「原語」の綴り方は現行の正書法とは異なり、また現在は使われていない用語も見られるが、全体としては現在の用語とさほど変わらない(例えば上の“Sprak Kunst”は、現行の Sprakkunst と分かち書きの方式が異なるだけである)。

「今譯」とは要するに大槻が採用していた用語であるが、これも含め、『九品集』以来の訳語は、一語を除いてすべて漢語である。唯一の例外は「今譯」の中の「受身(うけみ)」である。これは大槻が考案した用語であると大槻自身が述べていることもあり、一般にそう認定されている。『日本国語大辞典』も、「受身」の初出例として「語法指南」の一節を挙げている。しかし、大槻が用いた意味での「受身」という用語は、実際には大槻以前の文献にも見出せるため、小さな点ではあるが、「訳述起原」に関する従来の記述には修正が必要となる。また、大槻自身が考案したという記述をそのまま鵜呑みにしてよいものかどうか、若干の疑問も生じる。

「受身」と関係する文法用語に「助動詞」がある。助動詞を独立した品詞として立て、日本文法の体系に位置づけたのも「語法指南」が最初であると言われるが、西洋語由来の翻訳語としての「助動詞」は大槻以前に使用例があり、これまでに指摘されているところでは『蘭英和字彙』が最も古く、田中義廉『小學日本文典』がそれに続く。しかし、これについても、さらに古い使用例を指摘することができる。『日本国語大辞典』は、「助動詞」の初出例をヘボンの『和英語林集成』第3版に求めているが、この選択には考えるべき問題がある。

以下、まずは「助動詞」の初出例認定に関わる従来の解説を取り上げ、やや混乱した面のある記述を整理しながら、事実関係および問題の所在を明確にする。その上で、本稿共著者の調査に基づく新たな初出認定の可能性を検討するが、ここで指摘される明治3年の文献が、実は「受身」の初出文献でもあることを明らかにする。「語法指南」を巻頭に収めた『言海』は明治22年刊であるから、「受身」の初出年代は定説よりも19年早まることになるが、この同じ明治3年の文献には、現在の「能動」に相当する《働き掛け》という用語も出てくる。「受身」と同様に、「働掛」もまた大槻が最初に用いたと考えるのが従来の立場であり、『日本国語大辞典』も「働掛」の初出文献として「語法指南」を挙げている。本稿ではこの初出認定も見直すことになる。「受身」と「働掛」を一对の文法用語として用いる大槻の記述は、「語法指南」以前から存在していた方式を踏襲したものであるとさえ考えられるのである。

## 2. Hulpwerkwoord/Auxiliary Verb と「助動詞」の訳述起原

『語法指南』の復刻版（勉誠社）には、同書の来歴や『廣日本文典』との異同を詳述した有益な解説がある（北原 1996）。その解説には、

「助動詞」という呼称は、大槻が、本書において用いたのを嚆矢とする。

と述べた一節がある（p.31）。しかし、後述のように、「助動詞」という用語が「語法指南」以前から用いられていたのは確実であるから、この引用にある「助動詞」とは、従来「助詞」の類と同列に扱われていた語の中から活用のあるものを分離しつつ、活用はあっても「独立ニハ用キラズ、必ズ他語ノ下ニ就キテ、其意ヲ補助スル用ノモノ」（『語法指南』）として動詞とも区別した、要するに現代的な意味での「助動詞」を指すものと思われる。この意味で「助動詞」を最初に用いたのは大槻である、というのが上に引用した一節の趣旨であろう。同様の記述は阪倉（1957）にも見られる。

『日本国語大辞典』は、「語法指南」（1889）より3年早いヘボン『和英語林集成』（第3版、1886）を初出文献として挙げている。以下に引用したのは、「助動詞」の項に見られる用例情報である。

\* 改正増補和英語林集成〔1886〕「Jodoshi ジョドウシ 助動詞」

\* 語法指南〔1889〕〈大槻文彦〉「助動詞は、動詞の変化の、其意を尽さざるを助けむが為に、別に其下に附きて、更に、種々の意義を添ふる語なり」

『日本国語大辞典』は用例の選択について、「その語、または語積を分けた場合は、その意味・用法について、もっとも古いと思われるものを挙げると述べ、用例の並べ方は、「時代の古いものから新しいものへと順次並べる」という基準に従っている<sup>2)</sup>。見出し語の「助動詞」は語積が二つに分けられ、次のように①西欧語と②日本語のそれぞれについて意味が記述されている。

### 【助動詞】

①西欧語で、もと独立した動詞であったものが、他の動詞を補助して相（mood）や時（tense）などを表わす役目を持つようになったもの。独立性の点で、日本語の補助用言に近い。

②日本語で付属語のうち、活用のあるもの。他の自立語（詞）、または自立語を含む連

語に付属して、叙述の意義を補ったり、話手の判断の性質を表現したりする。助詞とともに、付属語、または辞と呼ばれる。動辞。

この②の意味での「助動詞」に対する用例として、「語法指南」と『和英語林集成』が挙げられているのであるが、上に引用した並べ方の基準に従い、『和英語林集成』を最初に置いた、ということであろう。

しかし、ここには若干の疑問がある。語釈②の用例として「語法指南」を挙げるのはわかるが、同じ意味の用例の「もっとも古いと思われるもの」としてヘボンが挙げているのは、どのような判断によるのであろうか。

上でも触れたように、「助動詞」という用語自体は、ヘボン第3版よりも古い田中義廉『小學日本文典』にも見られる。この点については、『日本国語大辞典』も次のような補注を付けて特に触れている。

#### 【補注】

(3) 「助動詞」という用語は明治初年に例が見られるが、まだ一品詞とは認められず、動詞の項で説明され、現在の助動詞以外のものも含まれている。(イ) 明治七年刊の「小学日本文典」(田中義廉)では助動詞の章を立て「有」「得」「為」を格別な助動詞とし、独立しないものとして「る」「た」「たり」「き」「けり」「ぬ」「む」などを挙げている。(ロ) 明治九年刊の「日本文典」(中根淑)では動詞の項で、「常に動詞の後に添ふて、以其の意味の足らざる所を助け成す者」を助動詞と言っているが、文末に使われる「か」「や」「かな」「がな」「かし」「よ」「ね」「な」など、現在助詞とされているものまでを含めている。

要するに、「助動詞」という名称であっても、それが「まだ一品詞とは認められず」、「現在の助動詞以外のものも含まれている」場合には、語釈②で言う「助動詞」にはあたらない、という立場かと思われる。

しかし、それではなぜヘボンが挙げているのであろうか。次に再録したように、ヘボンは見出し語として「助働詞」を挙げ、その説明として“an auxiliary verb”と記しているにすぎない<sup>3)</sup>。

JODŌSHI ジョドウシ 助働詞 n. (gram.) an auxiliary verb.

したがって、この「助働詞」が何を意味しているのか、例えば日本語文法における独立した品詞であるのか、田中義廉風のものであるのか、あるいは auxiliary verb の訳語として使われ

ていた語彙であるのかは、厳密に言えば不明のはずである。

「助働詞」という見出しは、ヘボンの第2版（1872）には見られず、第3版（1886）で新たに加えられたものであるから、この第2版と第3版の間に使用頻度が増したために、見出し語として採用されるに至ったものと考えられる。

第3版の序文は、“During the fourteen years which have elapsed since the publication of the last edition of this Dictionary” という一節から始まり、第2版出版以来の14年間、著者が旧版の訂正や改良、語釈の拡大、新語と用例の追加に従事していた旨が記されている。しかし、日本人の驚くべき変化と急速な進歩によって日本語の語彙は増大しているため、新語の追加については取捨選択を余儀なくされたとして、次のように述べている。

[The author] has limited himself to such words only as are **in popular and general use**. Most of these words are of Chinese derivation. (Preface to the Third Edition, 1886, emphasis added)

新語の追加は「一般によく使われているもの」に限ったということであり、それらのほとんどは漢語であるとも述べている。したがって、新たに採用された「助働詞」は、当時すでに“in popular and general use”であったと考えられるのであるが、「助働詞（助動詞）」という単語が新聞や雑誌に出てくるのは稀であろうから、要するに当時の文法書や教科書の類では、この単語が普通に使われていた、ということであると思われる。しかし、どのような文法書や教科書から、ヘボンはこのように判断したのであろうか。

次のようなことは確実に言える。すなわち、ヘボンの言う「14年間」は、いわゆる西洋式日本文典が大量に書かれた時期であり、田中義廉（1874）と同年刊の藤澤親之『日本消息文典』（1874）、中根淑（1876）と同年刊の小笠原長道『日本小文典』（1876）、その翌年の春山弟彦『繙日本文典』（1877）や藤井惟勉『日本文法書』（1877）、その2年後の中島操『小學文法書』（1879）などを見ても、日本語文法の用語として「助動詞」が広く使われていたことがわかる。

他方で、この「14年間」は英文典の翻訳が盛んに行なわれた時期でもあり、英語の auxiliary verb の訳語として「助動詞」が一般に使われていたという事実もある（数は少ないが「助働詞」もある）。例えば、William Swinton: *New Language Lessons* の翻訳である斎藤秀三郎の『スウイントン氏直譯』（1884: 239）は、auxiliary verb の訳語に「助働詞」を充て、Goold Brown: *The First Lines of English Grammar* を訳した中西範の『ゴールドブラウン英文典直譯』（1884: 103）では「助動詞」が使われている。

「助動詞」という訳語は、英語以外の文典の翻訳でも使われていた。ヘボンの「14年間」と重なる時期には、ドイツ語文典としては Edmund Schäfer の *Leitfaden beim Unterrichte in der deutschen Sprache*（初版 1850）が定番であったが、これを翻訳した多賀貫一郎の『ドイツ語文法

書』(1880:218)は、原文(p.44)の“Hilfszeitwörter”に「助動詞」を充てている。

以下でも触れるように、訳語としての「助動詞」の歴史はさらに古い。一例を挙げるなら、ヘボン第2版と同じ刊行年の『英語通俗英文典』(1872)は、auxiliary verb をすでに「助動詞」と訳している。また、第2版の翌年には、柴田昌吉・子安峻の『蘭英和字彙』(1873)が出版されているが、「助動詞」はここにも出てくる(阪倉1957:2)。『蘭英和字彙』には Auxiliary という見出しがあり、「輔助<sup>タススケ</sup>ノ」という訳語が充てられているが、用例として *Auxiliary verb* という組み合わせも挙げられており、それが「助動<sup>ジョウドウシ</sup>詞」と訳されている。

「語法指南」を巻頭に附した『言海』は1889年刊であるが、その原稿は1882年には完成していたと言われるので(『言海』「おくがき」、大槻文彦は1882年の段階で、すでに「助動詞」という用語を使っていた可能性が高い。これを文献で確認することはできないが、大槻が「語法指南」以前から「助動詞」という用語を用いていたことは確実に指摘できる。

「大槻文彦博士年譜」(寛1928)の1886年の項に、「九月、『言語篇』を譯述し刊行す」とある。『言語篇』とは、*Chambers's Information for the People* (1875)という百科事典に収められた項目の一つ“LANGUAGE”を大槻が翻訳したもので、1886年に有隣堂から翻刻出版されている。「語法指南」の3年前である。

百科事典の原文には、次のように“auxiliary verb”という用語が出てくる。

In many of the tense-endings it is possible to recognise **auxiliary verbs**. [...] The future tense in French is known to have been formed within historical times by affixing the present tense of the **auxiliary** *avoir*, ‘to have,’ to the infinitive of the verb—for example, *finir-ai* is, ‘to-finish-have-I,’ or, ‘I have to finish.’ (p. 23, emphasis added)

この一節に対応する『言語篇』の訳文は次に示したとおりである。

動詞の時を示す語尾に於ては元來其**助動詞**たることを識別し得べき者多し。[...] 又佛語にては往昔「有つ」と云ふ義の**助動詞** *avoir* の現在なる者を不定動詞に加へて以て其動詞の未來を示し同じ者の如し。例へば *finir-ai* は「終へてもつ吾」或は「吾れ終ふべくもつ」の義なり。(p. 51、強調は引用者による)

原文の“auxiliary verb”あるいは“auxiliary”という用語に対して、大槻がすでに「助動詞」という訳語を充てていたことがわかる。

上に引用した『言語篇』の一節は、筆者たちの手許にある有隣堂版からのものである。すでに触れたように「語法指南」より3年早い文章であるが、『言語篇』は元来、*Chambers's Information* の翻訳として文部省が印行した『百科全書』(92分冊)の一部であり、有隣堂版

はその翻刻である。したがって、初版はさらに古く、大槻の自伝には明治「十六年出版」と記されている<sup>4)</sup>。初版は未見であるため正確な刊行年は把握できていないが、自伝の記述に従うなら翻刻版の3年前(1883年)には初版が出ていたことになる。これは「語法指南」の原稿が完成していたと言われる1882年に近いので、やはり大槻は、この頃には「助動詞」という用語を用いていたものと考えられる。

1879年には、チェンバレン(B.H. Chamberlain)の『英語變格一覽』という英文法の解説書が出ている(著者名の表記は「英國人 王堂チャムブレ」)。Elements of English Grammar(『チャムブレ英文典』)より14年早い、著者が日本海軍兵學校教師の頃の著作であるが、「助動詞」という用語は“Auxiliary Verbs”の訳語として同書でも使われている。

上で触れたいいくつかの文献を年代順に並べたのが次の簡単な表である<sup>5)</sup>。

1872	ヘボン『和英語林集成』第2版	
1872	『 <small>ビロウ</small> 通俗英文典』	助動詞 (auxiliary verb)
1873	『 <small>ビロウ</small> 英和字彙』	助動詞 (auxiliary verb)
1874	田中義廉『小學日本文典』	助動詞
1874	藤澤親之『日本消息文典』	助動詞
1876	中根淑『日本文典』	助動詞
1876	小笠原長道『日本小文典』	助動詞
1877	春山弟彦『 <small>ビロウ</small> 日本文典』	助動詞
1877	藤井惟勉『日本文法書』	助動詞
1879	中島操『小學文法書』	助動詞
1879	チャムブレ『英語變格一覽』	助動詞 (auxiliary verb)
1880	『 <small>ビロウ</small> セーフェル文法書』	助動詞 (Hilfszeitwörter)
1884	『 <small>スウェンソン</small> 英語學新式直譯』	助動詞 (auxiliary verb)
1884	『 <small>スウェンソン</small> 英語學新式直譯』	助動詞 (auxiliary verb)
1886	大槻文彦『言語篇』(翻刻版)	助動詞 (auxiliary verb)
1886	ヘボン『和英語林集成』第3版	助動詞 (auxiliary verb)

【表 1】

このように整理してみると、ヘボン第3版に至る時期には、西洋文法、西洋言語学、日本文法を問わず、日本における「語学」の世界では、「助動詞」という用語が“in popular and general use”であったことがわかる。

さて、『言海』所収「語法指南」の刊行年は、ヘボン第3版の3年後、1889年である。上に引用した『日本国語大辞典』の語釈②は、要するに「語法指南」に始まるとされる「助動詞」の捉え方であるから、大槻以前には存在しなかったはずである。上で引用した【補注】もこの事実関係を前提として書かれている。仮にそうであるなら、「助動詞」の意味を語釈②のように理解する限り、その初出は、ほぼ必然的に「語法指南」に求めざるを得なくなる。単純なロジックの問題としてそうなる<sup>6)</sup>。それ以前の文献に見られる「助動詞」は、それが auxiliary verb の訳語であれば、むしろ語釈①の用例として挙げるべきであり、そうでなけれ

ば、厳密な意味は別として、とにかく「助動詞」という用語が出てくる文献として挙げるべきであろう。その際、次の (A) ～ (C) に示したような区別を明確にしておくと思われが少ないと思われる。

- (A) 西洋語の“AUXILIARY VERB”を指す、訳語としての「助動詞」
- (B) 訳語由来ではあっても、また現代的な意味とは異なっている、とにかく日本語文法の用語として使われた「助動詞」
- (C) 現代的な日本語文法の意味における「助動詞」

従来の文献には、(A) ～ (C) のような区別を前提としているのかどうか明確ではない記述も見られる。例えば、『研究資料日本文法』(明治書院)には次のような解説がある。

「助動詞」という名称は、田中義廉の『小学日本文典』(明治七年)・中根淑の『日本文典』(明治九年)・ヘボンの『和英語林集成』第3版(明治一九年)などに使用されており、洋文典の影響のもとに使用されはじめたものと推定される。(中山 1985: 81)

おそらく (B) についての記述かと思われるが、仮にそうであるなら、ここでヘボン第3版が挙げられている理由がよくわからなくなる<sup>7)</sup>。上でも触れたように、ヘボン第3版の短い記述からは、これを (A) ～ (C) のいずれかに振り分ける根拠が得られないからである。

次のような解説は、読者の側で (A) ～ (C) の区別を念頭に置いて読む必要がある。

明治以降の助動詞研究は、西欧言語学の影響のもとにはじめられた。英文典の auxiliary verb の訳語として助動詞という名称をはじめて用いたのは田中義廉『小学日本文典』(明7)とされているが、日本語の一品詞として助動詞をはじめて独立させたのは大槻文彦(明39、前身は『言海』(明22)の巻首に収められた『語法指南』)である。(梅原 1979: 308)

「auxiliary verb の訳語として助動詞という名称をはじめて用いた」のが田中義廉ではないことは、【表1】からも明らかであるから、この解説における田中への言及は、(A) ～ (C) を区別した上で、その (B) について述べていると理解しなければならない。したがってこの解説は、(A) については特に触れていないことになる。

それでは、(A) の初出はどの文献に求めるべきであろうか。



### 3. 『<sup>ビ子ヲ</sup>長原版 英文典直譯』

日本語文法における「助動詞」という用語の歴史について、阪倉篤義は次のように述べている。

まず、助動詞という名称が、そもそも広日本文典によるものと考えられる。もつとも、auxiliary verb に対する訳語としての「助動詞」という語そのものはやくからあり、(たとえば明治六年刊の「英和字彙」にも見える)、また日本語法の用語としても、すでに田中義兼の小学日本文典に用いられている。この書物の刊行は明治七年のことであるから、十七年に草稿が成り、二十四年に刊行(二十二年に一部刊行)された言海巻頭の語法指南よりも、この方が先に世にあらわれたわけである。(阪倉 1957: 2)

この一節は明らかに (A) ~ (C) を区別した記述であり、(B) と (C) の始まりをそれぞれ田中、大槻の文典に求めている。(A) については、初出とは述べていないが、田中より早い文献として『<sup>ニ</sup>英和字彙』を挙げている。

すでに述べたように、訳語としての「助動詞」は、『<sup>ニ</sup>英和字彙』(1873) より早い『<sup>ニ</sup>通俗英文典』(1872) に使用例がある。しかしこれが初出ではない。『<sup>ニ</sup>通俗英文典』はヘボン第2版と同じ年に出ているが、この明治5年の頃は、日本におけるドイツ語辞典編纂の草創期でもあり、小田条次郎・藤井三郎・桜井勇作の『<sup>ニ</sup>袖珍字書』も1872年に刊行されている。そこには次のような記述があり (p.594)、

Hilfszeitwort, n. ジョダウシ助動詞 (文典ノ語)

文法用語としての“Hilfszeitwort”がすでに「助動詞」と訳されている。

『<sup>ニ</sup>袖珍字書』よりも1年早い司馬凌海の『<sup>ニ</sup>獨逸文典字類』(1871)を見ると、本編に先立つ「畧符之例」に挙げられている文法用語の中に“Hilfszeitwort”があり、これも「助動詞」と訳されている。凌海は「才力絶群歐洲六個國の語に通じ」、日本における「獨和對譯字書」も「凌海を以て元祖とす」(土屋元作 1912: 253)と言われる人であるが、その監修になる『<sup>ニ</sup>和譯獨逸辞典』(1872)は特に有名である。しかし、こちらの方は、本文にも巻末の略語表にも「助動詞」は見当たらない。

以上のように、ドイツ語系の文献では、1871年の『<sup>ニ</sup>獨逸文典字類』に「助動詞」の初出例を確認することができ、これは本稿で言及してきたどの英語系文典や辞典よりも早い。しかし、訳語としての「助動詞」の初出は、少なくともあと1年は遡ることができる。

日本における英学史を語る上で、特に重要ないくつかの文法書がある。幕末に始まった洋書の翻刻は、明治以降盛んに行われることになるが、マレー (L. Murray)、ブラウン (G. Brown)、カッケンボス (G. P. Quackenbos)、スウィントン (W. Swinton) などと並んで、次に挙げたピネオ (T. S. Pinneo) の文法書も日本では広く用いられた。

PINNEO, Timothy Stone. *Pinneo's Primary Grammar of the English Language, for Beginners.* Cincinnati: Winthrop B. Smith and Co. (1849; Revised and Enlarged, 1854)

1869年には、これが慶應義塾読本『ピンネオ英文典』として翻刻され、翌年の1870年には、永嶋貞次郎による翻訳本『ピンネオ英文典直譯』が出版されている。すでに触れた『ワグネル通俗英文典』(1872)は、この永嶋訳に続く翻訳である。ただし、「翻訳」とは言っても、これらは原文の英単語を日本語の単語で置き換え、英語の語順のままに配置したものであり、日本語の単語の下に漢数字を附して読み方の順序を示す、いわゆる「返り読み式」(豊田實 1939)の直訳である。例えば『ピンネオ英文典直譯』の「二百十五章」直前には次のような文がある。

何ヲ 為スカ 言辞ハ ヲゲセレリーナル 徴スヲ  
三 五 二 一 四

すなわち、「ヲゲセレリーなる言辞は何を徴すを為すか」と読める文である。原文 (p. 93) でこの箇所を確認すると、次のように「ヲゲセレリー」は auxiliary であることがわかる。

*What does the word auxiliary mean?*

訳文の「何を徴すを為すか」の「為す」は、does を訳したものと思われる。上の auxiliary は単独で用いられているが、別の文脈では、次のように“auxiliary verbs”という組み合わせでも使われている (p. 93)。

*What are auxiliary verbs?*

この“auxiliary verbs”が、『ピンネオ英文典直譯』(1870)では「助動詞」と訳されている。『高橋英和字彙』よりも3年早く、『袖珍字書』より2年早い文献である。上の【表1】と一部重複するが、見出し語に「助動詞」を採用しなかったヘボン第2版の前後の文献を整理すると次のようになる。

1870	明治3	『 <small>長編</small> 英文典直譯』	助動詞 (auxiliary verb)
1871	明治4	『獨逸文典字類』	助動詞 (Hilfszeitwort)
1872	明治5	『 <small>袖珍</small> 字書』	助動詞 (Hilfszeitwort)
1872	明治5	『和英語林集成』第2版	
1872	明治5	『 <small>通</small> 通俗英文典』	助動詞 (auxiliary verb)
1873	明治6	『 <small>英和</small> 英和字彙』	助動詞 (auxiliary verb)
1874	明治7	田中義廉『小學日本文典』	助動詞

【表2】

1870年(明治3)の前年には、『改正増補和譯英辭書』(いわゆる『薩摩辭書』)が出ている。見出し語の“auxiliary”は、形容詞としては「扶助ノ」、名詞としては「相ヒ助ケル人、味方」と説明されているが、“auxiliary verb”という組み合わせは見当たらない。これは文久2年の『英和對譯袖珍辭書』(1862)を踏襲した方式である<sup>8)</sup>。日本初の英文法書と言われる『英文鑑』(1844)は、Lindley Murrayの英文法のオランダ語訳を邦訳したものであるから、当然ながら《助動詞》の概念は出てくるが、『英文鑑』の訳語は「助辭」である<sup>9)</sup>。

ピネオの英文典と並んで当時広く使われた文法書にクアッケンボス(Quackenbos)の*First book in English grammar*がある。この文典も早くから「直訳」され、『英和英文典直譯』(1870)、戸田忠厚『英文典獨學』(1871)、栗野忠雄『英文典直譯』(1886)などが出ているが、これらの翻訳では、英語のwill, shall, may, can, have, beなどは「助詞」と訳されており、「助動詞」という用語は使われていない。Quackenbosの原文では、auxiliaryという用語は基本的に名詞として使われており、“auxiliary verb”という組み合わせは出てこないのも、おそらくこれを反映して「auxiliary=助詞」という訳し方になったものと思われる。

ちなみに、Quackenbosを翻訳した一人である栗野忠雄は、同じ時期にPinneoの*Primary Grammar*とSwintonの*New Language Lessons*も訳述し、それぞれ『英和英文典直譯』(1887)、『英和英文典直譯』(1887)として出版している。ヘボン第3版の翌年に出たこれらの翻訳書では、auxiliary verbは「助働詞」と訳されている。同じ年、漢学者の岡三慶はピネオの英文典を「粉本」とする『英和漢文典』(1887)を出しているが、「助動詞」という用語はこの漢文典にも見られる。

以上のように、訳語としての「助動詞」は、永嶋貞次郎『英和英文典直譯』(1870)に最も古い使用例を見出すことができる。永嶋は福澤諭吉の門下生であり、慶應義塾で講義も担当していた人であるから、1870年より早い明治元年前後の時期に、「助動詞」という訳語が慶應義塾で通用していた可能性はある。同様に、司馬凌海の「助動詞(Hilfszeitwort)」も、彼の私塾「春風社」で早くから通用していたかも知れない。こうした私塾の関連資料からさらに古い用例が見つかる可能性もあり、また、筆者らが見落とした文献もあると思われるので、あくまでも現時点ではという条件が付くが、「助動詞」の訳述起原に関する本稿の結論は、およそ上述のようなことになる。

#### 4. Lijgend/Passive の邦訳と「受身」の問題

現在の文法用語では、「受動文」は「受身文」とも言われ、ほぼ同じ意味を表わす用語として「受動」と「受身」が併存している。多くの場合、これらは交換可能であるが、「受動態」とは言っても「受身態」と言うことはあまりなく、習慣的に固定された用法もある。しかし、文法記述において「受身」という表現が広く用いられていることは確かである。

本稿冒頭でも触れたように、この「受身」という用語は、一般に大槻文彦が考案したものと考えられているのではないかと思う。大槻自身がそのように述べていることもあり、筆者らも永らくそう信じていたが、必要があって行なってきた文献調査<sup>10)</sup>の副産物として、少なくとも「受身」の初出例を大槻の文典に求めることはできないと考えるに至ったので、以下、この点について若干の問題を提起したい。

大槻文彦が「和蘭字典文典の譯述起原」に載せている訳語対照表には“Lydende w. w.”という見出しがある。“w. w.”とは“werk woorden”——現在の正書法では *werkwoorden*——すなわち英語の“verbs”を意味する略語であり、“Lydende”は、現在の *lijdende* すなわち“passive”を意味する形容詞である。したがってこの見出しは、英語の“passive verbs”に相当するオランダ語の文法用語を挙げたものであるが、その日本語訳は、大槻によれば次のように変遷したという。

- 「被動詞」(『九品集』)
- 「所活言」(『語法解』)
- 「被業詞」(『六格前篇』)
- 「所用詞」(『蘭學凡』)
- 「被動活用」(『語學新書』)
- 「受身」(「今譯」)

「今訳」とは要するに大槻が採用していた訳語であるが、英語の“passive voice”に対する訳語として、「語法指南」には「所相」と「受身」が出てくる。これらはそれぞれ、“active voice”の「能相」「働掛」に対応する用語であるが、『廣日本文典』(第一八一節)はこれらについて次のように述べている。

- 「働掛、受身」は、劍術、柔術、等の専門語より探れり。又、「能相、所相」の字面も、佛經の語より探れり、「能<sup>ク</sup>ス」と「所<sup>ル</sup>能<sup>セ</sup>」となり、師を「能<sup>ノウ</sup>化」といひ、弟子を「所<sup>シヨケ</sup>化」といふも、是なり。

『語法指南』復刻版の解説は、この一節を引用した後で次のように記している。

これによれば、「受身」という述語は（そして「能相」「所相」などの述語も）、大槻が  
用い始めたものであるらしい。（北原 1996: 26）

上に引用した『廣日本文典』の一節を知る者は、おそらく誰もがこのように考えていると思  
われる。本稿の共著者もそうであった。したがって、次に引用する『日本国語大辞典』のよ  
うに、文法用語としての「受身」の初出例を「語法指南」に求めるのはごく自然である。

#### 【受身】

文法用語。ある動作、作用について、それを受けるものを主語として述べること。受  
動態。所相。

\* 語法指南〔1889〕〈大槻文彦〉助動詞「此の彼我の動作を、働掛（はたらきかけ）、受  
身（ウケミ）、或は、能相、所相、といふ」

語法指南のこの一節を、『日本国語大辞典』は次のように「働掛」の初出例としても挙げて  
いる。

#### 【働掛】

文法で、動詞の表わす動作作用として、主体が他に力を及ぼす場合。自動に対する他  
動、受動に対する能動にあたる。

\* 語法指南〔1889〕〈大槻文彦〉「此の彼我の動作を、働掛（ハタラキカケ）、受身、或  
は、能相、所相といふ」

しかし、「受身」という文法用語が「語法指南」以前に使われていたのは確実である。前  
節でも触れた小笠原長道『日本小文典』（1876）を見ると、その「第七章 動詞」において、  
他動詞には「能動受動ノ別アリ」と述べた上で、次のように説明している（ゴチックは引用  
者による強調）。

- 能動 即ハタラキカケ 打ツ、碎ク、讀ムノ類ナリ
- 受動 即ウケミ 打タル、碎カル、讀マルノ類ナリ

「ハタラキカケ」「ウケミ」を漢字では表記していないが、「能動」「受動」を説明するために、



アル 於テ 受ケ身ノ 態ニ

三十二 三十一 廿九 三十

すでに触れた「返り読み式」である。以下に原文を引用する。

ART. 210. The *Passive Voice* is that form of a verb in which the nominative represents the sufferer, or receiver of the action; as 'James *was struck* by John,' where *was struck* is in the passive voice.

原文末尾の“is in the passive voice”が、訳文では「受身の態に於てある」と訳されている。“passive”の訳語に「受身」が充てられているのは明らかである。

それでは“active”はどうかというと、実はこれが「働キカケ」と訳されている。次に引用した通りである。

第二百九章 他動 態ハ アル 其ノ 形デ ノ

一 二 十五 五 十三 六 十四 四

動詞 於テハ 夫に所ノ 主格ガ 表ハス 働者ヲ

三 八 七 十二 九 十一 十

譬バ ジョヌハ 打チシ ゼームスヲ ソコデハ

十六 十七 十九 十八 廿

ストリユックハ アル 於テ 働キカケノ 態ニ

廿一 廿五 廿四 廿二 廿三

ART. 209. The *Active Voice* is that form of a verb in which the nominative denotes the actor, as 'John *struck* James,' where *struck* is in the active voice.

原文末尾の“is in the active voice”が、訳文では「働キカケの態に於てある」と訳されており、“active”の訳語に「働キカケ」が充てられていることがわかる。

『長瀬英辞林直譯』(1870)の刊行年は、小笠原の『日本小文典』(1876)より6年早く、「語法指南」(1889)より19年早い。小笠原は、「各國の文典」について、「英佛日耳曼等各小異同ナキヲ免レズ然レドモ其大意ニ至リテハイヅレモ異ナルコトナシ」などと述べており(「第一章 總論」、諸外国語も研究していた人であると考えられる。とりわけ英文典については深く研究していたはずであるから、ピネオの原文はもとより、その翻訳本なども広く参照していた可能性がある。同じことは大槻についても言えるのであるが、当然ながら相互の

影響関係は不明とせざるを得ない。しかし、筆者らが調査できた文献だけに基づいても、次の表にまとめたような事実関係は確認することができる。

		active (voice)	passive (voice)
1870	『 <small>長原</small> 英文典直譯』	他動(態)、働キカケ	受動(態)、受ケ身
1876	小笠原『日本小文典』	能動、ハタラキカケ	受動、ウケミ
1878	大槻「文法會」第1回会合		
1882	『廣日本文典』「原稿」		
1889	「語法指南」	能相、働掛	所相、受身

【表3】

したがって、英語の Active/Passive に相当する表現として「働キカケ」「受ケ身」を用いた初出の文献は『長原英文典直譯』(1870)であり、これらが日本語文法の文脈で用いられた例は、「語法指南」よりも早い小笠原の『日本小文典』(1876)に見られる、という事実関係になる<sup>12)</sup>。

すでに触れたように、『廣日本文典』には次のような記述がある。

「働掛、」受身」は、劍術、柔術、等の専門語より探れり。

この一節を根拠として、「働掛」「受身」は大槻が独自に考案した用語であると考えられることは依然として可能である。永嶋の『直譯』や小笠原の『日本小文典』を大槻が見ていなかった可能性も否定できないからである。しかし、後世の我々が行なう初出例の認定という作業においては、こうした可能性に基づく想像はむしろ排除すべきであろう。

## 5. おわりに

大槻は「和蘭字典文典の譯述起原」において、「受身」という用語をオランダ語の“Lydende Werk Woorden”に相当する「今譯」と位置づけ、『九品集』の「被動詞」から続く、蘭学の系譜に連なる訳語として提示した。幕末の蘭学から明治30年代の洋学に至る学問の進展は、大槻のような学者にとっては連続した一つの流れとして捉えるのが自然であったものと思われる。しかし一方で、「働掛」や「受身」などの文法用語は、英文法の“Active/Passive”に対する訳語として、英学の草創期に独自に使われ始めたと考えても、現存する諸文献から読み取れる事実とは矛盾しない。蘭文典研究と英文典研究の連続性については、新たな視点から考え直す必要を感じているが、いずれにしても、「働掛」「受身」の初出例を「語法指南」に求めるというこれまでの常識的な記述方法は、本稿で提示した議論に鑑み、何らかの形で修正されなければならない。



我々は、しかし、「働掛」や「受身」という用語の解説から「語法指南」を削除すべきであるとは考えていない。その後の日本語研究に与えた影響を考えれば、「語法指南」への言及はむしろ不可欠であり、その重要性を後世に伝えることもまた、研究史の重要な役割であると思うからである。

## 注

\* 本稿の内容について鹿児島大学の三輪伸春教授および本誌匿名査読者の方から好意的かつ有益なコメントを頂戴しました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

1) 漢字語の「起原」は「起源」とも表記されるが、大槻論文では、初出の『史學雜誌』掲載版、『復軒雜纂』再録版いずれにおいても「起原」と表記されている。『復軒雜纂』は1902年10月に刊行されているが、これより早い同年3月、西川政憲を編者とする『新式勉學要訣』という本が出ている。同書は「當代知名の士、各々其の専門とする學に依り、青年諸氏の爲めにその研究と方法とを諸述せられたるものを蒐め、これを一冊にせしもの即ち本書なり」（編者序文）という内容であり、「理科研究方法」（石川成章）、「外國語研究方法」（水野繁太郎）などの概説が計8編収められているが、最後の「第八」として大槻の論文が再録されている。タイトルは「和蘭字典典の譯述起原」であり、ここでは「起源」と表記されている。表記が変更された理由は定かではないが、同じ1902年刊であっても『復軒雜纂』の方が半年ほど後であること、また『復軒雜纂』には大槻自身が「はしがき」を書き、初出の旧稿を改訂した箇所があると述べていることを考えれば、大槻の選択は「起原」であったと思われる。明治30年代の文献を調べてみると、漢字表記としては「起原」も「起源」も用いられている。ただし大槻の『語法指南』は「起原」のみを挙げ、「事ノ起レル原」と説明している。

なお、『復軒雜纂』は、分野別に再編集された新版が東洋文庫から刊行中であり、すでに第1巻が出ている（鈴木広光校注、平凡社、2002）。第1巻に「和蘭字典典の譯述起原」は収められていないが、巻末の『復軒雜纂』原本目次という付録には論文名が掲載されている。その表記が「起源」となっている理由は、本稿共著者にはよくわからない。

2) 第2版、凡例「出典・用例について」を参照。

3) 国字の「働」を用いた「働動詞」という表記は、ヘボン第3版の原文に従っている。この表記については以下の注7を参照。

大槻文彦は、「動」と「働」の表記について次のように述べている（『廣日本文典別記』73節）。

動詞ノ動ノ字ヲ、或ハ、人偏ヲ添ヘテ、働ト記スモノモアレド、俗字ナルノミナラズ、動作ノ動ノ字ヲ用キテ、事足レバ人偏ハ不要ナリ。

4) 東京日々新聞に連載された大槻文彦の自伝（五）に見られる。大槻（1909/1980: 52）を参照。なお、『言語篇』については、大槻の言語観を考察する文脈で齊木・鷲尾（2012b）が多角的に論じている。

5) 【表1】はいくつかの例を挙げたにすぎず、網羅的なものではない。明治期の西洋式日本文典における品詞名については、古田東朔（2010）、森岡健二（1988）、仁田義雄（2005）、山東功（2002）などの研究を参照。

6) 本文で「ほぼ」必然的に、と書いたのは、次のような理由による。「語法指南」は1889年刊であるが、『廣日本文典』の「例言」によれば、「語法指南」は『廣日本文典』の「原稿」を

「摘録」したものであり、その「原稿」は「明治十五年に成れりしもの」という。つまり、「語法指南」がその「摘録」であるところの原稿は、すでに明治15年(1882年)には出来上がっていたことになるが、これよりさらに早く、大槻は有名な「文法會」というものを立ち上げ、横山由清、内田嘉一、中根淑、南部義籌、那珂通世、井上哲次郎らと共に、『廣日本文典』で扱う様々な問題について議論を重ねていた。明治11年(1878年)から明治15年(1882年)のことである(『廣日本文典別記』自跋)。このような活動を通じて、大槻的な「助動詞」の概念が一部に広まっていたことも考えられるため、「語法指南」刊行以前に、その影響を受けた他の文典が出版されたとしても不思議ではない。この事実関係については、筆者らの文献調査は不十分であるが、こうした可能性を考慮して本文では「ほぼ必然的に」という表現にとどめた。

7) 注3でも触れたように、ヘボン第3版に出てくるのは「助動詞」ではなく「助働詞」である。『日本国語大辞典』もこの漢字表記の違いには言及していないが、この表記に何らかの意義を見出すべきかどうかは定かではない。この時期には、「動詞」「助動詞」という表記も「働詞」「助働詞」という表記も行なわれていたが、次のように、ヘボン第3版は「動詞」については「動」の字を用いている。

Dōshi ドウシ 動詞 (*hataraki kotoba*) n. (gram.)

A verb; also called *yōgen*, or *kwatsu-yōgen*.

ヘボンは序文において“With all his care and effort the author finds typographical errors have passed here and there undetected, especially among the Chinese characters.”と述べ、特に漢字については印刷上のミスが残っていると述べているので、「助働詞」がこれにあたるという可能性も否定はできないが、積極的にそう考える根拠もない。

8) 日本における英語辞典の歴史は豊田實(1939)をはじめとする英学史に詳しい。英語の辞書史全般については、林哲郎(1968)が8世紀のラテン語写本からOEDまでを通観している。最近の研究書には三輪伸春(2011)がある。先行研究の情報も豊富であり、『薩摩辞書』などにも触れている。

9) 『英文鑑』については杉本(1993)を参照。杉本・編(1993)は『英文鑑』の復刻である。

10) 齊木・鷺尾(2009, 2010, 2012a, 2012b)、鷺尾・齊木(2010)などに繋がる一連の調査。

11) 小笠原の『日本小文典』については、山東功(2002)が「地方教育者の文法教科書」という視点で阿保友一郎などを取り上げた中に言及がある。同書(pp.118-119)には、〈明治前期洋式日本文典の品詞分類〉として、西周「ことばのいしずゑ」からチェンバレン「日本小文典」に至る32編の文典における品詞名の一覧表が掲げられており、それには小笠原の文典も含まれているが、本稿で問題にした「受身」「働掛」などには言及がない。

12) ただし、前節の最後でも述べたように、初出文献に関する記述は常に暫定的なものである。より古い用例が見つかる可能性は常にあり、筆者らが見落とした文献もあると思われるからである。

## 引用文献

Brown, Gould (1823/1857) *The First Lines of English Grammar*. New York: Samuel S & William Wood.

Chamberlain, Basil Hall (1879) 『英語變格一覽』一貫堂。

Chamberlain, Basil Hall (1893) 『チャムブレン英文典』白井練一(東京)他。

- Chambers, William and Robert Chambers (1875) *Chambers's Information for the People*. Vol. II. Fifth edition. Edinburgh: W. & R. Chambers. [Reprint: Eureka Press, 2005]
- Hepburn, James Curtis (1872) 『和英語林集成』第2版. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.
- Hepburn, James Curtis (1886) 『和英語林集成』第3版. Shanghai: American Presbyterian Mission Press.
- Pinneo, Timothy Ston (1854) *Pinneo's Primary Grammar of the English Language, for Beginners*. Revised and enlarged. Cincinnati: Winthrop B. Smith & Co.
- Quackenbos, G. P. (1864) *First Book in English Grammar*. New York: D. Appleton and Company.
- Schäfer, Edmund (1850) *Leitfaden beim Unterrichte in der deutschen Sprache*. Köln: M. DuMont-Schauberg.
- Swinton, William (1878) *New Language Lessons*. New York: Harper & Brothers.
- 梅原恭則 (1979) 「解説」『論集 日本語研究7 助動詞』有精堂, pp. 307-320.
- 大槻文彦 (訳) (1886) 『言語篇』翻刻版, 有隣堂.
- 大槻文彦 (1889) 「語法指南」『言海』所収. [単行本は1890年刊, 小林新兵衛発行]
- 大槻文彦 (1897) 『廣日本文典』三木佐助 (大阪) 他.
- 大槻文彦 (1897) 『廣日本文典別記』三木佐助 (大阪) 他.
- 大槻文彦 (1898) 「和蘭字典文典の譯述起原 (一) ~ (三)」『史學雜誌』9.3: 189-201; 9.5: 384-398; 9.6: 465-475.
- 大槻文彦 (1902) 『復軒雜纂』慶文堂.
- 岡 三慶 (1887/1891<sup>3</sup>) 『類書漢文典』出雲寺.
- 小笠原長道 (1876) 『日本小文典』川勝徳次郎.
- 小田条次郎・藤井三郎・桜井勇作 (1872) 『袖珍字書』学半社.
- 筧 五百里 (1928) 「大槻文彦博士年譜」『國語と國文學』5.7: 23-38.
- 北原保雄・古田東朔 (編) (1996) 『語法指南』復刻版, 勉誠社.
- 北原保雄 (1996) 「解説」古田東朔・北原保雄 (編) (1996) 所収, pp. 3-38.
- 栗野忠雄 (訳) (1886) 『英文典直譯』柳河鉞次郎.
- 栗野忠雄 (訳) (1887) 『英英英文典直譯』日新館.
- 栗野忠雄 (訳) (1887) 『スウチン英文典直譯』日新館.
- 慶應義塾 (1869) 『ビズモ英英英文典』慶應義塾讀本, 尚古堂.
- 齊木美知世・鷲尾龍一 (2009) 「『日本文法論』とハイゼの獨逸文典」『人文』8: 43-98.
- 齊木美知世・鷲尾龍一 (2010) 「松下大三郎と非対格仮説の論理」未刊行論文.
- 齊木美知世・鷲尾龍一 (2012a) 「ヴォイスの複合～記述の歴史と現在～」影山太郎・沈力 (編) 『日中理論言語学の新展望3 語彙と品詞』第1章, くろしお出版.
- 齊木美知世・鷲尾龍一 (2012b) 『日本文法の系譜学 ～国語学史と言語学史の接点～』開拓社.
- 斎藤秀三郎 (1884) 『スウチン英文典直譯』日進堂.
- 阪倉篤義 (1957) 「助動詞はどのように研究されて来たか」『國文學 解釋と鑑賞』258: 2-7.
- 山東 功 (2002) 『明治前期日本文典の研究』和泉書院.
- 司馬凌海 (1871) 『獨逸文典字類』春風社.
- 司馬凌海・他 (1872) 『和譯獨逸辭典』春風社.
- 杉本つとむ (1993) 「『英文鑑』の研究」杉本つとむ (編) (1993) 所収, pp. 583-673.
- 杉本つとむ (編) (1993) 『英文鑑—資料と研究—』ひつじ書房.

- 大學南校助教 (訳) (1870) 『英英文典直譯』大學南校開版.
- 多賀貫一郎 (訳) (1880) 『英英文法書』競英堂.
- 高橋新吉・他 (1869) 『改正増補和譯英辭書』Shanghai: American Presbyterian Mission Press.
- 田中義廉 (1874) 『小學日本文典』田中義廉.
- 土屋元作 (1912) 『新學の先驅』博文館.
- 戸田忠厚 (訳) (1871/1883) 『英文典獨學』戸田忠厚.
- 豊田 實 (1939) 『日本英學史の研究』岩波書店.
- 永嶋貞次郎 (訳) (1870) 『英英文典直譯』尚古堂.
- 中島 操 (1879) 『小學文法書』萬象堂.
- 中西 範 (1884) 『英英文典直譯』開新堂.
- 中根 淑 (1876) 『日本文典』大角豊治郎.
- 中山緑朗 (1985) 「明治期の文法論と助動詞」『研究資料日本文法』⑦助辭編 (三) 助詞・助動詞辭典, 明治書院, p. 81.
- 西川政憲 (編) (1902) 『新新式勉學要訣』大學館.
- 仁田義雄 (2002) 『ある近代日本文法研究史』和泉書院.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部 (編) (2000-2002) 『日本国語大辞典』第2版, 小学館.
- 春山弟彦 (1877) 『小日本文典』浅井吉兵衛.
- 林 哲郎 (1968) 『英語辭書發達史』開文社出版.
- 藤井惟勉 (1877) 『日本文法書』正栄堂.
- 藤澤親之 (1874) 『日本消息文典』不由書院.
- 古田東朔 (2010) 『日本語 近代への歩み—国語学史2』くろしお出版.
- 堀達之助・他 (1862/1869) 『英和對譯袖珍辭書』藏田屋清右衛門.
- 三輪伸春 (2011) 『英語の辭書史と語彙史 方法論的考察』松柏社.
- 森岡健二 (1988) 『文法の記述』明治書院.
- 鷲尾龍一・斉木美知世 (2010) 「大槻文彦とチェンバレンの系譜 ～助動詞連結の普遍性と個性を論じ、受動使役をめぐる記述の歴史に及ぶ～」『英文法研究年報』57: 101-149.

## ENGLISH SUMMARY

### On the Earliest Japanese Terms for *Lijdend/Passive*

SAIKI Michiyo

WASHIO Ryuichi

Otsuki's grammar known as *Goboshinan* (1889) is widely believed to be the first work which used *ukemi* 'PASSIVE' as a technical term for Japanese grammar. For instance, Shogakkan's *Grand Dictionary of the Japanese Language* cites a passage from Otsuki's grammar as the earliest example in which the term is used. It is also generally believed that Otsuki himself devised the grammatical term *ukemi*, adopting it from the traditional Japanese martial arts where it had long been used with the meaning of 'DEFENSIVE'. The present paper claims based on comprehensive documentation that these accepted views on the origin of the grammatical term *ukemi* are incorrect. Similar issues arise as to the origin of the grammatical term *jodoshi* 'AUXILIARY VERB', which are also discussed in this paper.

*Key Words:* Fumihiko OTSUKI, *Goboshinan*, Origins of Japanese Grammatical Terms, *ukemi* 'PASSIVE/DEFENSIVE', *jodoshi* 'AUXILIARY VERB'